

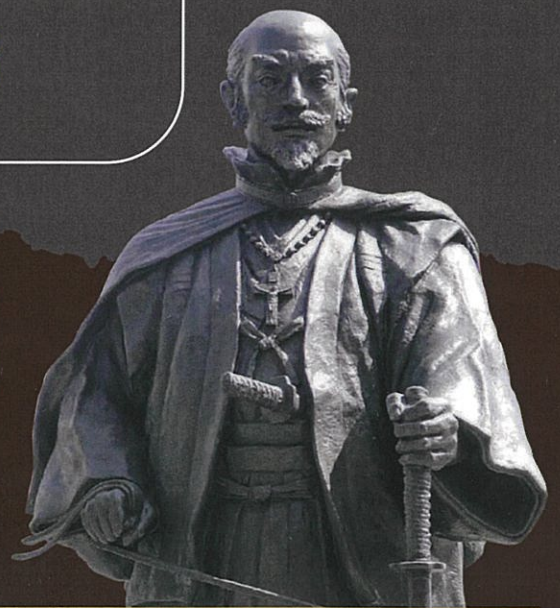


大友氏遺跡

史跡指定20周年記念シンポジウム

歴史とつながる
未来につなぐ
よみがえる大友館

予稿集



日 程

2022年4月16日(土)

J:COMホルトホール大分1F 大ホール

午後1時～午後1時5分

開会挨拶

午後1時5分～午後1時20分

活動報告

「伝えていきたい大友氏遺跡の魅力」

発表：FUNAIジュニアガイド

午後1時20分～午後2時20分

基調講演

「中世都市研究から見た大友氏遺跡」

講師：小野 正敏 (国立歴史民俗博物館名誉教授)

午後2時20分～午後2時40分

休 憩

午後2時40分～午後2時55分

報 告

「大友氏遺跡の将来計画について」

報告：中西 武尚 (大分市教育委員会文化財課)

午後3時～午後4時30分

パネルディスカッション

「未来につなげよう大友氏遺跡」

コーディネーター：小野 正敏

パネリスト：鶴田 巧 (大分市中央地区自治会委員連絡協議会)

佐藤 弘俊 (NPO法人大友氏顕彰会)

佐野 真紀子 (株式会社日本政策投資銀行大分事務所)

佐々木 健策 (神奈川県小田原市文化財課)

坪根 伸也 (大分市教育委員会文化財課)

午後4時30分～午後4時40分

閉会挨拶

講師紹介



講 師
小野正敏氏
(国立歴史民俗博物館名誉教授)

<経 歴>

1947(昭和22年)生まれ。明治大学文学部卒業。専門は日本考古学。

福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所、国立歴史民俗博物館考古研究部教授、同副館長、大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事等を歴任。現在、国立歴史民俗博物館名誉教授。

全国の中世遺跡の調査委員を務められ、発掘調査や整備への指導・助言を行う。

1996年の大友氏館跡発見以来、現在にいたるまで、大友氏遺跡の調査指導を、2016年からは史跡大友氏遺跡整備検討委員会の委員長として、史跡整備についても多くのご指導をいただいている。

<主要な著書>

『戦国城下町の考古学』講談社選書メチエ108 1997年(単著)、『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会2001年(共編著)、『戦国時代の考古学』高志書店2003年(共編著)、『中世の系譜』高志書店2004年(共編著)、『遺跡に読む中世史』高志書店2017年(共編著)

中世都市研究から見た大友氏遺跡

小野 正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）

1998年豊後府内の中心である大友氏館の発掘が始まった。そして、2001年には国の史跡指定を受け、20年を迎えている。「大友氏遺跡」は、戦国大名大友氏の館を核にした豊後府内という都市総体を意識した名称である。これまでのこの遺跡の多彩な調査研究の成果は、戦国時代研究の広い分野に大きな影響を与え、特に中世都市研究では第3のエポックともいえる評価ができる。

豊後府内の調査成果は、なぜそれほど重視されるのか？ 中世考古学の立場からこの遺跡のもつ意味を考えてみたい。

1 都市遺跡の発掘から「中世考古学」が始まった

東京オリンピックの3年ほど前、1961年（昭和36）、広島県福山市の草戸千軒町遺跡が発掘された。瀬戸内海にそそぐ芦田川河口の河床から中世の町がそっくり出てきたのである。私はいろいろな場で、「中世考古学は草戸千軒町遺跡の発掘から始まった」という。しかし、よく知られるように、それ以前にも中世の城跡や墓、あるいは焼き物の窯跡などの発掘は各地で行われていた。なぜ草戸千軒町遺跡が中世考古学のエポック、研究史を変えた遺跡といえるのか。その理由は、城や墓、あるいは窯などの生産遺跡は、その時代の限定された分野であり、中世という時代を説明することにはならないと考えていることにある。例えば、今日、皆さんに東京駅と皇居、浅草寺をみせて「これが東京だ」と紹介するのと同じではないか。草戸千軒町遺跡は、当時の人びとの日常生活の主舞台であった町を調査した最初の例となったのである。

都市や町は、領主も武士も、商人や職人、僧侶から乞食まで、様々な人びとがともに暮らし、政治、経済、信仰、生産など多様な結びつきで小宇宙を形成している、その空間を発掘することでその時代が考古学から総合的にわかるのだといえる。また、都市は古いものを残すとともに、時代の最先端を表現する。そこに時代の主張がみえる。中世の都市や町、村などの遺跡論、人びとの生活を支えた生活財、その生産・流通などの遺物論、領主の城や館などからの権力論などを目指すこと、中世考古学とは、中世の時代の遺跡を掘ることではなく、まさに中世を考古学から語ることである。だから比喩的にいえば、この中世の町の発見が中世考古学の発見だったといえるのである。

福井県福井市の特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の調査も大きなエポックとなった遺跡である。ここは、戦国大名朝倉氏が越前の首都としてつくった城下町である。1971年、国の特別史跡として山城や大名館、寺院、町屋など、城下町全体を広範囲に保存することに成功した。

1960年代、日本列島の各地に、列島改造と称してブルドーザーが入り、多くの遺跡が壊滅されようとした時代のことである。指定に伴い、県立の一乗谷朝倉氏遺跡調査研究所が設置され、戦国時代城下町の調査研究を進めるとともに、その実像を史跡公園や展示として市民や研究者に発信する、現在も続く長期的、組織的な事業が開始されたのである。

この二つの都市遺跡調査が、今進められている大友氏遺跡にもつながる、遺跡を史跡指定によって保存し、発掘調査、学際的研究、史跡整備公開を通じて中世を語るという大きな動きになっていったと理解できる。いわば草戸千軒町に生まれ、一乗谷で育った中世考古学の「方法」が、この大友氏遺跡でも継承されているのである。

2 文献史学、歴史地理学、考古学、相互に補う中世史研究（図1）

中世を考古学から研究するには、当然だが他の学問分野との協業が欠かせない。

文献史学の中でも、領主論とならんで都市史研究が中心的なテーマであり、50年代から60年代は、典型的分類、発達史的な視点で、例えば、集落を港町とか門前町、城下町などと分類して都市研究が進められていた。70年代に入ると、「都市」とは何か、どういう空間を都市と呼ぶのかなど、都市を理論づける新しい視点が提示されていく。網野善彦氏の「無縁・公界（くがい）・楽」、石井進氏の「イエ」論理など、文献史学の研究者が、都市遺跡に関してもどう論理付け、説明するか議論をしていた時代であった。また、歴史地理学では、現在の地表に残された土地の形状や昔の字図、いまに伝わる地名などから町や都市を調査し、都市の領域、町場の空間構造の復元が盛んに論じられていた。

しかし、どちらにも足りないものがあつた。文献史学では、文字や絵図に記録されたところしか対象とできず、また絵図や文字史料は具体性をもつが、それらが訴訟などの目的に合わせた作成者の主観を交えているため、どこまで実像に近いのか、その保証はないという問題をもつ。さらに史料にはその残り方に偏りが大きいことも特徴である。同じように歴史地理学でも、「やかた」という地名が残っているから、細い水田がまわり、中に広い四角の畠があるから濠を巡らせた館があつたのではないか、といった地名や地割を主たる資料としていたが、その地名がいつごろ生まれ使われてきたのか、その土地はいつからその形になったのか、歴史的な、時間的な保証はないといえる。

一方、新参者の考古学が、都市や町を意識的に発掘するようになったのが、ちょうど1970年代から80年代にかけてである。遺跡は、文字史料のような偏在性はなく、列島規模で客観データが増えていくのが特徴である。しかし、考古学も目の前にビジュアルな遺跡としての都市や町はみえるが、そこからどう論理づけていくのか、特にソフトの分野は考古学だけでは歴史像を描けない状況があつた。それではと文献史学、歴史地理学、考古学が一緒に相互補完しながら中世史を考えていこうとなったのが90年代である。特に都市や町の問題、出土陶磁器などから流通や権力などをキーワードにして、学際的な研究会が企画された。この大友氏遺跡でも2001年には中世都市研究会が、2011年には日本貿易陶磁研究が開催されたのは、そんな動向のなかであつた。

3 現在もいきている大都市の発掘

同じ頃もう一つの大きな動きがあった。大規模都市の発掘調査である。京都、博多、堺など、現在も機能している大都市に、考古学の大トレンチが入る、中世日本の代表的な都市の中が大規模に発掘調査されたのである。

最初に行われたのが京都で、地下鉄烏丸線の調査である。まさに烏丸通りという、中世京都の中軸の通りの下を京の町を南北に貫くトレンチとなった。そのおかげで、一見長い時間変わらないかのような京都が、権力の変化や新しい社会状況に合わせて時代ごとに大きく変化を遂げてきた、むしろ、その時代の最先端の思想が積極的に表現された町だということが、明らかにされたのである。福岡県福岡市の博多でも、1977年に地下鉄工事のための発掘調査が始まり、同じころ始まった博多駅から港へ向かう大博通り拡張に伴う博多駅築港線道路の発掘調査も博多の真ん中を海まで貫くトレンチとなった。その結果、ここでも秀吉の博多の町改造の影響をとどめている現在の町の地下に、それとは全く異なる中世や古代の町が残っていることがわかったのである。

古代から続いた日本の都京都、そして古代中世と日本を代表する国際都市博多の調査が明らかにしたその変化こそが、都市の本質だともいえるものである。都市は、その時代と権力をもっとも先鋭的に映して変わっていく。端的に言えば、「都市は、時代と権力を映す鏡」といえる。都市遺跡を発掘調査することの意味もまさにそこにある。

4 豊後府内の発掘調査と意義

大友氏遺跡―大友氏館と豊後府内町遺跡の調査の意義を、戦国時代研究の視点から一言で表現すれば、あの戦国城下町一乗谷を相対化したこと、といえるだろう。一乗谷の発掘では、良好な遺構の状況が可視化され、戦国城下町の像を固定化してしまう、どこの遺跡も一乗谷に重ねてステレオタイプのみる傾向が生まれていた。大友氏遺跡の発掘は、それを打ち砕き、個別の大名権力や都市の機能、性格によりこんなに異なる館や都市像がある、本来の多様性を例示したのである。これは両者にとっていい成果、というよりも戦国時代研究全体にとって大事な投げかけであったといえるだろう。具体的にみてみよう。

豊後府内の調査（図2）

現在の大大分市は、近世の府内城の周辺に県庁、市役所などがあつまって中心部を構成している。一方、戦国大名大友宗麟（1530～87）の時代には、今の市街地から南にはずれた、大分川の左岸に府内町が作られていた。

このかつての府内町一帯が、大分駅を中心とした都市再開発計画の対象地となり、国道10号線などの道路の拡幅・付け替えやJR日豊本線の高架化、県道21号線の新設などが実施された。この工事に伴う発掘調査が、京都や博多と同様に、豊後府内町に「キ」の字の大規模トレンチをいれた形となって、中世府内町の実態が垣間見えてきたのである。また1998年には、府内町の核である大友氏の館の発掘が開始され、大規模な庭園が姿をみせると、これを契機に、市街地の中にある2町四方、約200メートル四方もある大規模な館を保存し、後世に残す困難な事業が始まった。史跡大友氏館として指定されたのは2001年のことであった。2021年には館の南半分を占める大きな庭園の整備が完了し、開

園している。現在は、館西半の解明を目指した発掘調査が進行中で、並行して館の表にあたる東半の整備事業が計画されている。

館と町に「キ」の字に入れられたトレンチは、それまで調査の手が及ばなかった中世府内町の実態を明らかにしてきたが、さらに幸いなことにここ豊後府内には江戸時代に描かれた「府内古図」とよばれる戦国期の府内町を描いた絵図が存在する。絵図には、町の中心に大友館や御蔵場が描かれ、大友氏が町作りをする以前から存在していた万寿寺などの諸施設とともに、南北4本、東西5本の街路により区画された格子状の町が記録されている。そして、各々の格子の部分には町名が付けられており、通りを単位とする町から構成される都市であったことが想定された。

絵図の中心に描かれた大友館の東側にあたる国道10号線の発掘では、実際に現在の道路の下に重なった戦国時代の南北幹線道路が発掘され、また館の前面や北東隅には東西方向に直交する街路が確認され、これらの街路に面して町屋や寺院などの区画が並ぶ町並みが姿をみせたのである。現在の街路網とほぼ重なる府内古図の町の信憑性が裏付けられたことは、他の遺跡にはない府内町の研究の大きな資産となった。もちろん、すべてが絵図通りでないのはむしろ考古学の成果であり、そこが考古学の出番である。

一方、現道路の拡幅のための調査のための発掘では道路部分が主となる制約があり、まだ町屋をはじめ街区の全体像が判明していない。万寿寺南の寺小路町など広範囲に発掘された地区では、街路に面してウナギの寝床のような間口が狭く奥に長い町屋が並び、その背後に井戸や便所、大きなゴミ穴などがある町の景観が確認されている。

また、興味深いのは、絵図にある町毎の木戸が実際に発掘されたことである。館の北東、幹線道路の交差点では道路面に大きな一对の柱穴や礎石がみつき、ここに木戸がたっていた。これが先の絵図の町の辻々に鳥居のように描かれた木戸で、木戸の北側が唐人町、南側が桜町にあたる。この地点をみると木戸を挟んで南北で道路側溝や舗装が違うことが確認され、道路の維持管理がこうした町単位によって担われていたことが想定された。この木戸は、街路を共有する両側町の境界に存在し、府内町を構成する各町共同体の象徴としての機能が強いものとして理解される。(図3)

府内の全容を説明できるまでにはさらに多くの時間をかけた調査が必要だが、これほどの大規模な都市遺跡の全体像がある程度推定できる成果を20年ほどの短い期間で明らかにできたことには驚くよりほかはない。あの一乗谷は、半世紀以上の年月をかけて発掘を続けてきた結果である。

大友氏は町づくりに何を目指したか

豊後府内町の景観の特徴は、名前のとおり、城下町ではない、府中らしさである。町は広い幅員をもつ街路網で方眼に構成され、多くの商職人の町屋が軒を連ねたにぎやかな町並みを中心であった。大友氏の館もその中心街区を構成し、堀や土塁をもたない。戦国城下町と異なり、町や屋敷には原則的に防御施設がなく、城は町から離れた上野原にあり、さらに遠く高崎山を詰めの城としている。戦国の世に大友氏がこの町に求めたのは、軍事機能ではなく、開かれた交易の場としての町だったといえよう。

この国際貿易の町、豊後府内を特徴づけ、他の戦国時代の町と大きく異なるのが、よく知られるキリシタンに関わる施設である。大友宗麟自身も 1578 年には洗礼を受け、いわゆるキリシタン大名となったが、同じ頃、教会や宣教師の宿舎などが与えられたことがイエズス会宣教師の書簡に報告されている。その後、コレジオ（学校）、病院、墓地などの施設が作られ、布教の拠点として整備がすすんだとされる。絵図には一番西の南北街路に沿った場所に「ダイウス堂」と書かれており、これに隣接する南側の発掘では、キリシタンの墓も確認されている。おそらくこの付近にこれらのキリシタン関連施設が集まっていたと推定されている。また町の各所からは、キリスト教徒がロザリオ（十字架）などと同じように首から提げた信仰具のメダイも発見されている。こうした成果からは、県内のキリシタン墓の調査などとも連携した戦国期のキリシタン研究の拠点となることも求められよう。

もうひとつが、唐人町である。絵図では、大友館の北隣に唐人町の町名があり、「伊勢参宮帳」には中国人らしい具体的な人名も記されている。発掘では街路を挟んだ稱名寺側の堀から、骨牌と呼ぶ薄い麻雀牌のようなゲーム札や唐枕、中国の磁器生産の窯道具など、中国との直接的な関係をうかがわす遺物や金属、革、骨などの生産に関わる遺物などが出土し、中国人や貿易商人、特殊な職人などの混住が推定されている。

こうした宣教師をはじめ、中国系の貿易商人やヨーロッパ人など、商人や高度な技術をもつテクノクラートたちが住み、国際的な町が成立していたことがわかる。

府内町で出土した陶磁器にもこの時代の南蛮貿易の特徴がみられる。たとえばミャンマーやタイで焼かれた大型の甕、ベトナム産の茶碗や皿、壺、中国南部の華南で焼かれた多色の釉薬を掛けた器など、同時代のほかの都市では例が少ない資料を大量に出土している。この中の壺や大甕などはそれが商品ではなく液体や胡椒などの顆粒状の商品を運ぶコンテナであり、多彩釉を掛けた華南の製品は茶の湯や花生として流行する人気商品であった。まさに南蛮貿易の拠点になっていたこの町の性格が出土品にも顕著である。

さらに特徴的な遺物として挙げたメダイを分析すると、ヨーロッパからもたらされたメダイとともにこの町で鑄造された品が多いことが判明している。大友館の東の名ケ小路町と唐人町の辻にある町屋の発掘では鉛を原料にしたメダイ制作が確認され、また同じ町屋で鉛の分銅（秤の重り）も生産していた。大友氏は計屋（はかりや）をおき、公認の刻印をつけて秤の分銅を管理したが、それにあたる。その鉛の同位体分析によれば、鉛の産地が東南アジア産と判明し、町からはその鉱山の特徴的なコマの形をした鉛のインゴットも発掘されている。

東南アジア産の陶磁器や香料、鉛、中国華南産の陶磁器、町中にあふれる南蛮貿易の品々。大友氏が目指した国際貿易都市のねらいがここにあったとおもわれる。どうも大友氏は敬虔なキリシタンを目指したのではなさそうである。南蛮貿易の富と戦国時代の必須の軍需品である海外からの鉛と銃砲、これを優先的に取引し、独占することに戦略的主眼があったのではないか。当時のポルトガルは貿易利権の拡大とイエズス会による布教が表裏一体となった戦略をとって海外展開をしていた。大友氏をはじめ戦国大名がポルトガル船寄港

による「異産至宝」(海外の珍品)と「兵器軍需品」の入手、特に後者の調達を重視した時代のなかで、そこに積極的に介在することで布教の拡大をはかった宣教師の姿をうかがわせる。ポルトガル船が大友氏に求めたものも、火薬の原料の硫黄と銀であった。

こうした視点からみると、大友館の隣、町の中心部にある唐人町、それと対照的に西の町はずれにあてがわれたキリシタン施設、これも大友氏の町づくりの意識を反映しているようにみえる。この時期の唐人町は、豊後府内だけではなく、一乗谷や北条氏の小田原(神奈川県)など、各地の城下町や湊町に確認される。しかし、一乗谷では城戸の外の湊町の一画にあり、小田原では城下町の中心から離れた新たに開発された新町にある(図4)。豊後府内のように、館と並ぶ町の中心にあるのは珍しい。まさに貿易商人優遇の町づくりだったといえそうである。

そのコンセプトの違いは、一乗谷の都市景観と比較すると明確になる(図5)。一乗谷は、戦国の城下町としていかに町全体を守るか、館を守るかを前面にした町である。町の入り口は大きな土塁と濠をセットにした城戸口が閉鎖し、町の中心にはさらに濠と土塁で囲われた朝倉館がある。館正面の土塁には石垣が巡り、土塁の隅には櫓がついている。背後の山城とセットになった戦国時代らしい権力者の館、町の景観が特徴である。また町の空間構造には朝倉氏を頂点とする大名の擬制的なイエを反映した権力構造が表現されている。館の前面には馬場、周囲には宗家に関わる館や寺院群が配置され、川を挟んで内衆、年寄衆と呼ぶ重臣の大型屋敷群、その外側に寺院や町屋が配置される同心円構造をもつ。何よりも朝倉館の上の平場にある初代の墓が、イエ=血の紐帯の象徴となっているのである。

館にみられる大友氏の志向

絵図には、館は東の幹線道路に面して周囲には白く塗られた塀が回っており、大規模な濠が見えない。東に表門を開き、西、南、北にそれぞれ1カ所ずつの門が描かれる。大友館の東南コーナーの発掘でわずかに残された砂や粘土を細かく何層にも積み重ねた痕跡が、館を囲む施設が築地塀だったことを示している。いまでも古い寺院などを囲う大きな土塀のようなあの築地塀が正面の施設だった。宗麟が義統に家督を譲り、大規模に館を作り直す時に「土圍廻屏」の普請を領国の武士たちに命じた書状が残っており、おそらくそれにあたるものといわれる。町の街区を使った防御を意識しない館、まさに国際貿易都市の主人らしい指向の屋敷と評価できる。京都の足利将軍邸や細川管領邸など、都市の中にある権力者の屋敷と同じスタイルを採用していたらしい。絵図の描き方は、このことを表現していたのである。

発掘では、表門を入ると広場があり、その正面に中心建物があつた。大友館で「大おもて」と呼ばれたこの中心建物が儀式や儀礼を行うための主殿に相当する建物である。南側の庭園に伴っては、立花、茶の湯、香などの室内遊芸や連歌、和歌など文芸の寄合などで使われる会所に相当する建物もあつたと推定される。しかし、庭園周辺は後世の削平が大きく、残っていない。こうしたハレの空間の西側や北側には、この館を支える台所など日常的なケの機能の建物群があつたと想定され、現在発掘調査が進められている(図6)。

こうした空間は、この時期の大名クラスの館に共通する原則的な構造であるが、その機

能をどのように実現するか、細部の景観には、主人の権力志向の違いが表現されている。なかでも、大友館の池庭は東西 67m、南北 30m もあり、戦国時代としては最大の庭園で特に大規模である。大きく館の南半分を占め、広い州浜をもち、観賞用の建物群も離れている。そんな特徴をもつこの池庭は、都の将軍邸や管領邸に連なる前代からの伝統的な系譜を持つもので、徳島県勝瑞で発掘された阿波国守護細川館の庭園とも共通し、守護大名系の庭園といえよう。対照的なのは朝倉館で、石組を主体とした池庭が館の奥の泉殿や数寄の小座敷などの建物と一体化した機能が優先されている。館の外構のみならず、下剋上で越前をとった朝倉氏などにみられる当世風、戦国大名系の庭園といえようか（図7）。

興味深いことに、大友館と同様の守護系の庭園が発掘されたのが常陸の大名小田氏の本拠小田城本丸（茨城県つくば市）や小田原の北条氏政邸である。特に小田城本丸は、その空間構成全体が大友館のそれと酷似している。北条氏は東国のなかでも下剋上の典型といわれる戦国大名として知られるが、なぜ守護系の伝統的な庭園を選択したのだろうか。両者に共通するのは、伝統的な権威への熱い視線である。小田氏は、関東八家と呼ばれる鎌倉以来の名誉を誇り、北条氏は、関東支配のために家格浮揚とともに権威付けの一環として関東の首府として小田原に「府中」を志向し、館にも守護系の権威空間を表現したのだと理解できる（図8、9）。

同じ時代に、都市構想とともにその権力の象徴である館にも権力の性格と志向が表現されている。逆にいえば、都市や館の景観から権力のあり方を読み取ることができる。そこに一律、均質ではない個性的な戦国時代の日本列島の各地の様相が見えてくると考える。

まとめにかえて—未来の「豊後府内」へ

草戸千軒町は、芦田川河床に発見され、調査者自らが「幻の中世都市」と呼んだように、約 30 年に及ぶ長い発掘調査を終えて河川改修によって、地上から幻のように消えてしまった。私が「実像の戦国城下町」と呼んだ一乗谷は、400 年を超えて忽然と水田の下から姿を現し、今は整備保存され戦国の町として、地元の人々が大事に残してくれた山間の疑似的な中世景観の中で生きている。いわばタイムカプセルのような戦国の町の復興、再現を目指したのである。

一方、この豊後府内は、現在進行形の大分市の都市再生の過程で再発見された町であり、新たな町の再生と一体となって調査や整備公開が進展している。その発掘成果は、中世の町が現在の町を作ったことを示している。言い方を変えれば、戦国都市豊後府内を考えることは、現在の、そして未来の大分の町を考えること、機能を失った化石化した「遺跡の保存」とどめることなく、積極的な未来の都市のパーツとして位置付けることが可能であり、必要である。かつてその中心であった大友館が再びよみがえり、これからも大分の町の核となり、中世と現在の町を融合させた、そんな町が未来の大分なのだと思います。

「文化財」としての「史跡」保存に留めることなく、都市のパーツとして史跡が生きていくためには、何が必要なのだろうか。一乗谷とは異なり、都市の中に戦国の町を再現す

るのは困難であり、別の方法で遺跡の再生、共存を探ることが求められている。行政は、市民は、研究者は、何ができるだろうか。

そんな未来への道程は長く、中世の豊後府内の町で解明しなければならないことも山積している。あの一乗谷の事業は、既に半世紀を過ぎたが、今も継続中、一乗谷でも新たな姿を模索する日々が続いている。

図版引用文献

大分市教育委員会 2016『大友府内 22』(本文・表編)大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第141集

小田原市教育委員会 2016『史跡小田原城御用米曲輪発掘調査概要報告』小田原市文化財調査報告書 179

つくば市教育委員会 2015『国指定史跡 小田城跡』

図1 中世都市の学際的研究

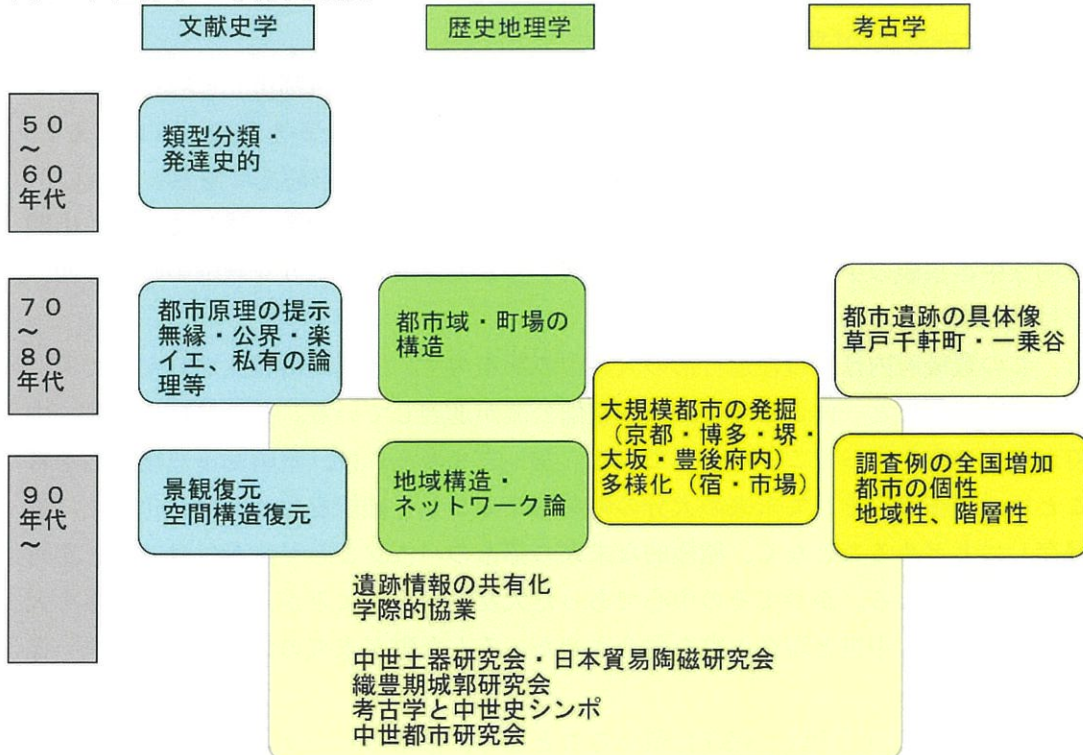


図2 豊後府内の調査 (大分市教委提供)

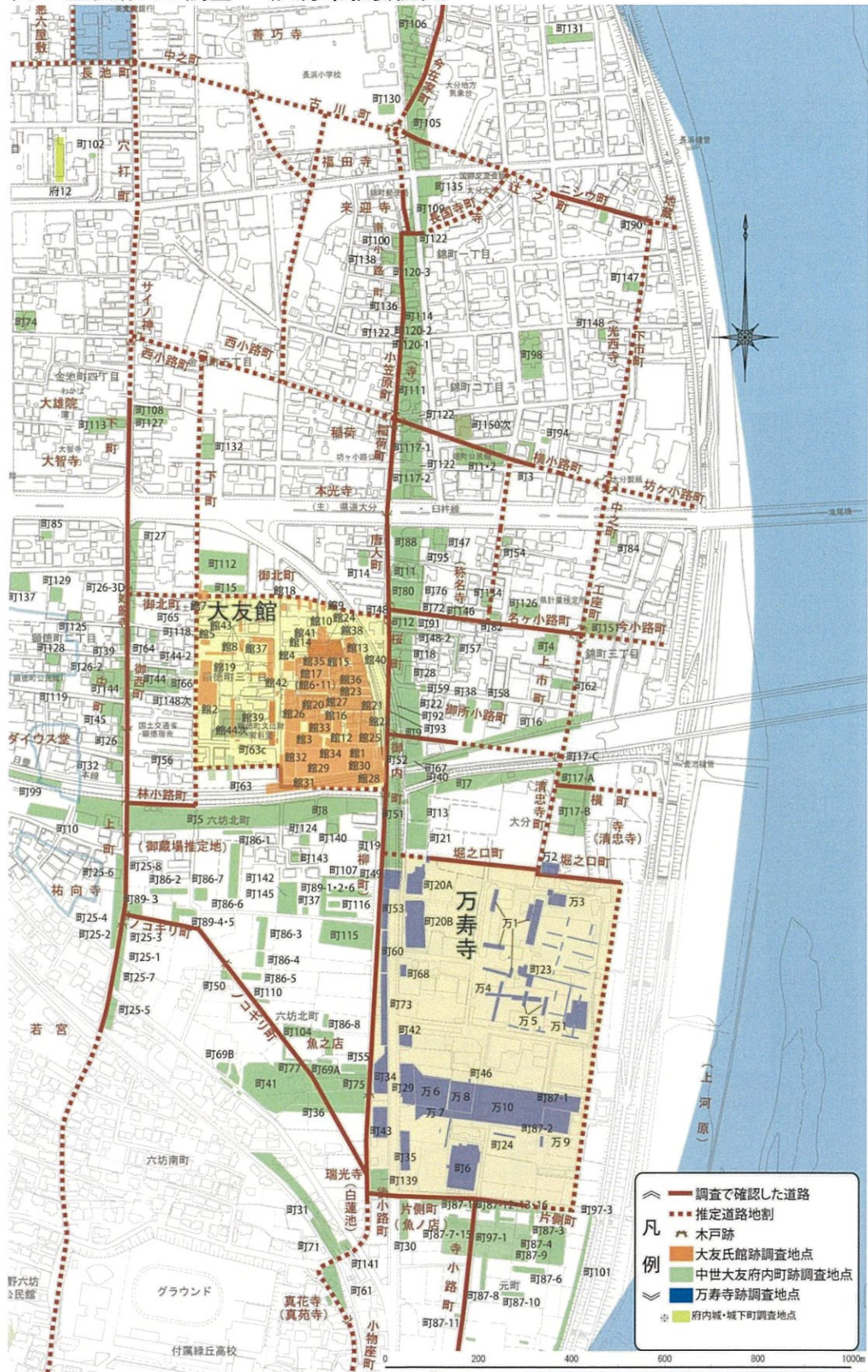


図3 唐人町と桜町の発掘 (大分市教委2016に加筆)

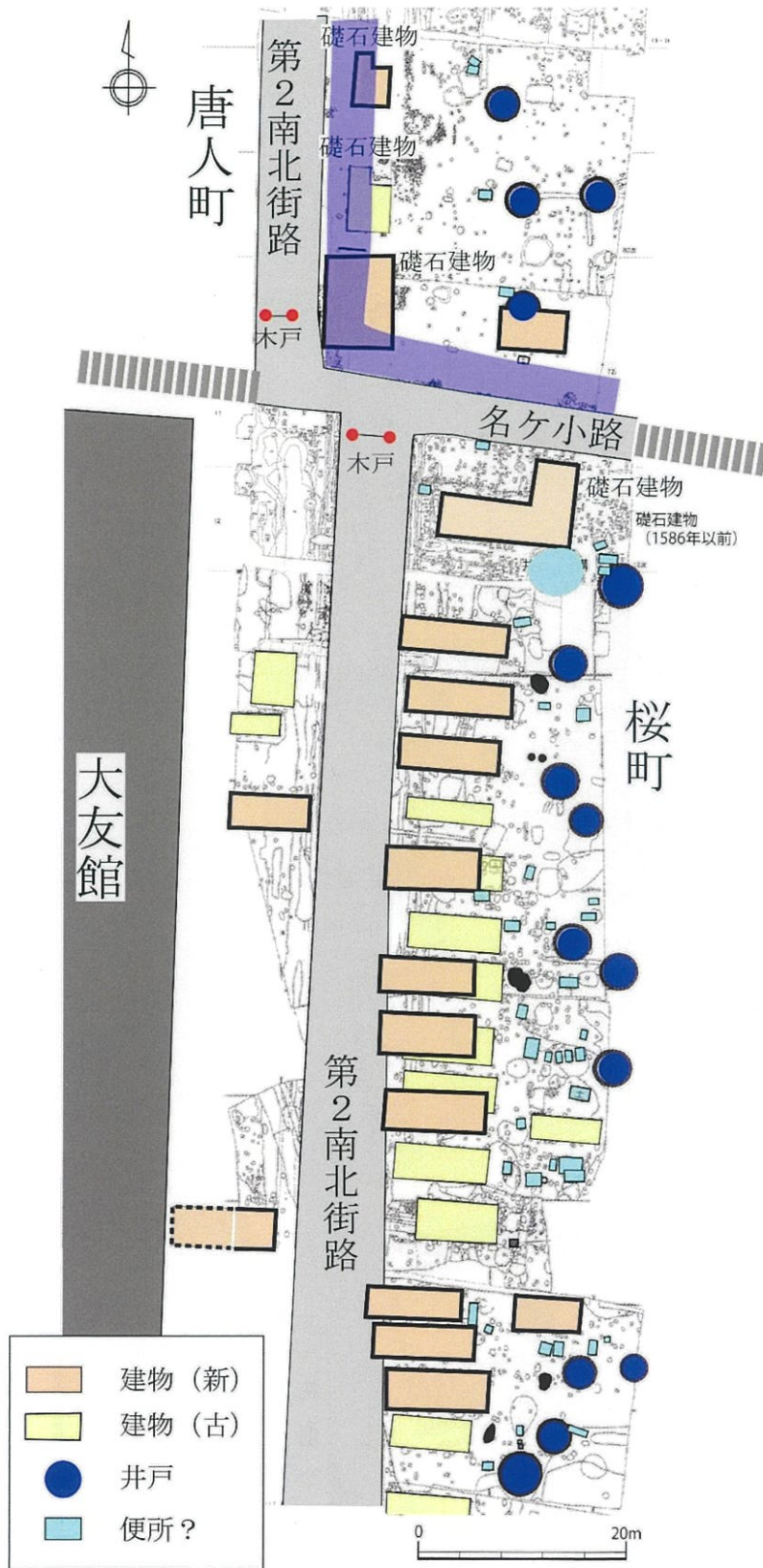


図4 小田原の都市空間模式図

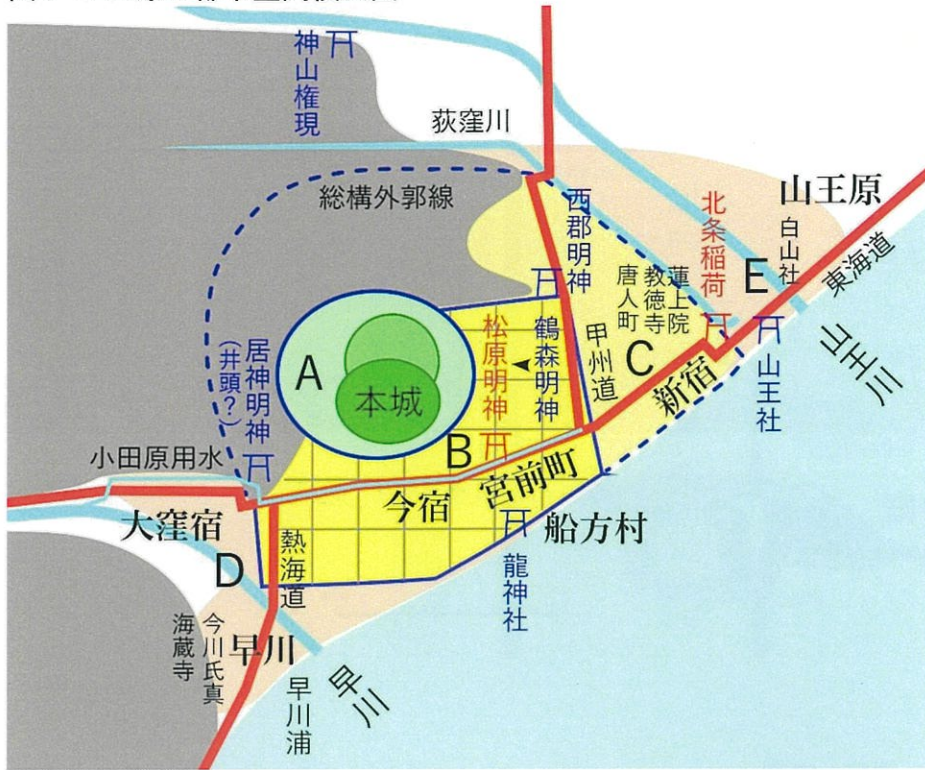


図5 一乗谷の都市模式図

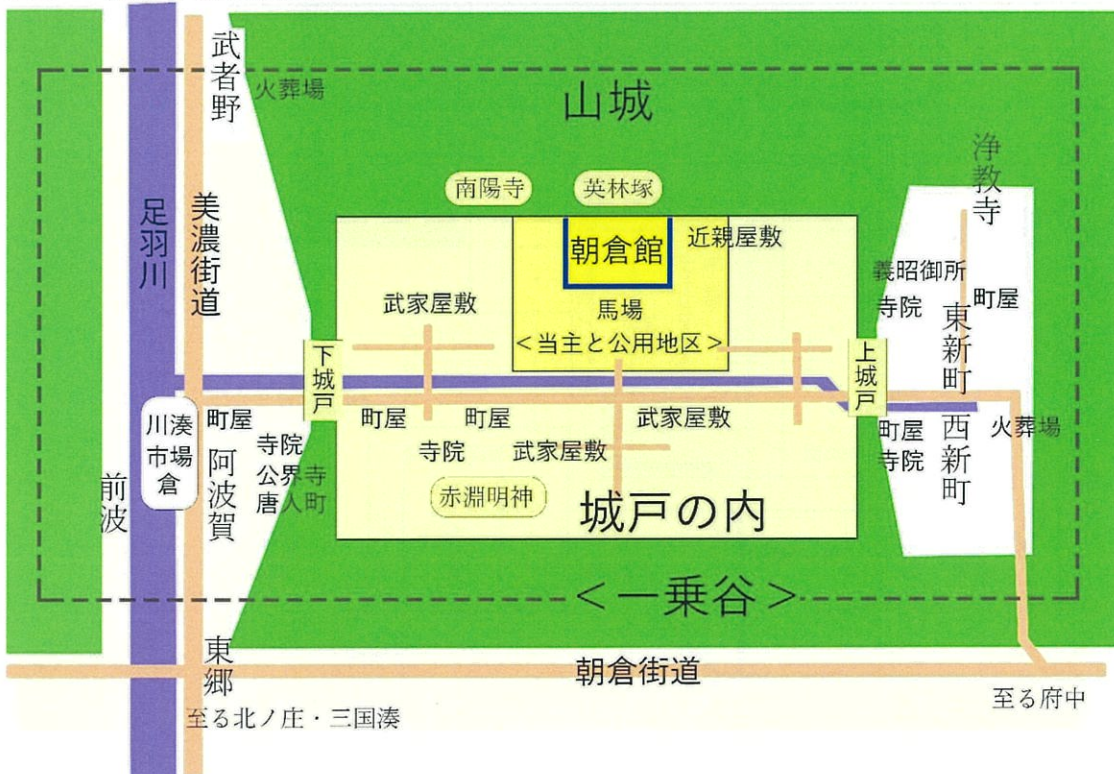


図6 大友館のハレ空間（大分市教委提供図面より作成）

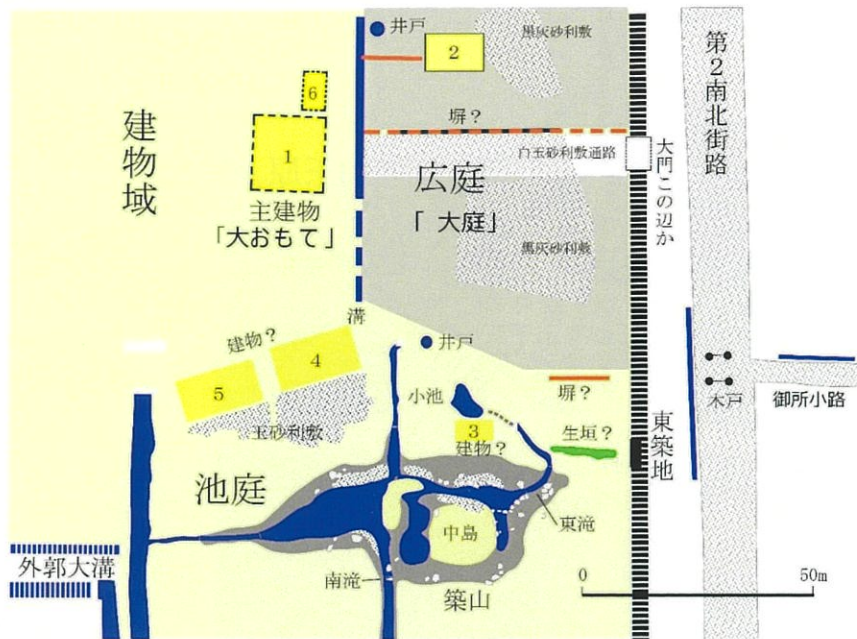


図7 朝倉館のハレ空間と庭園

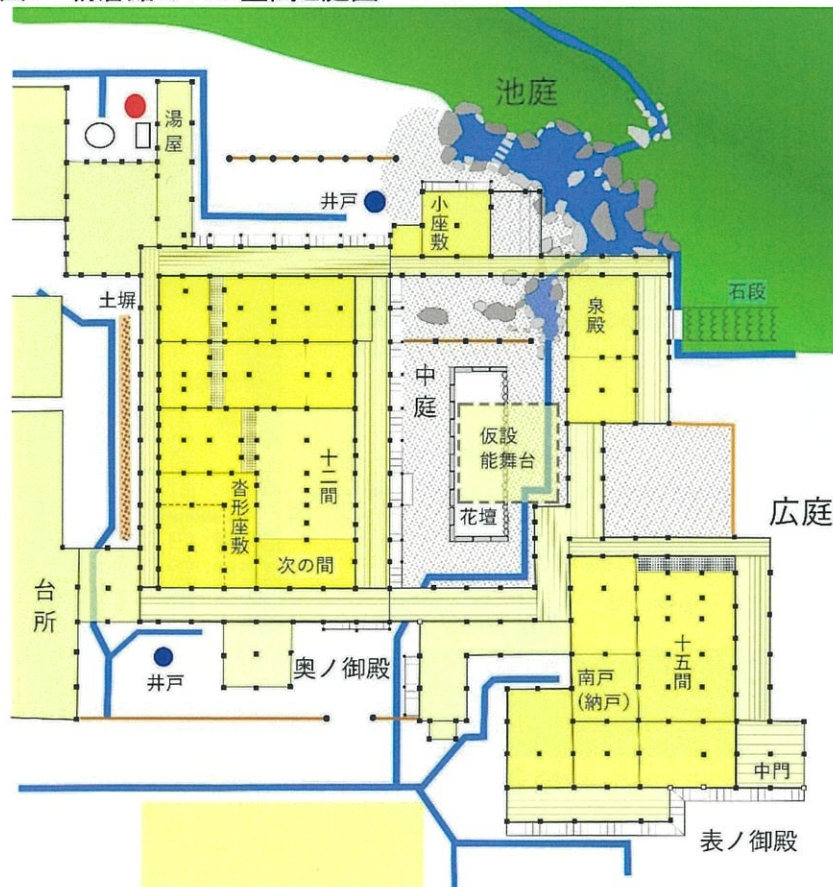
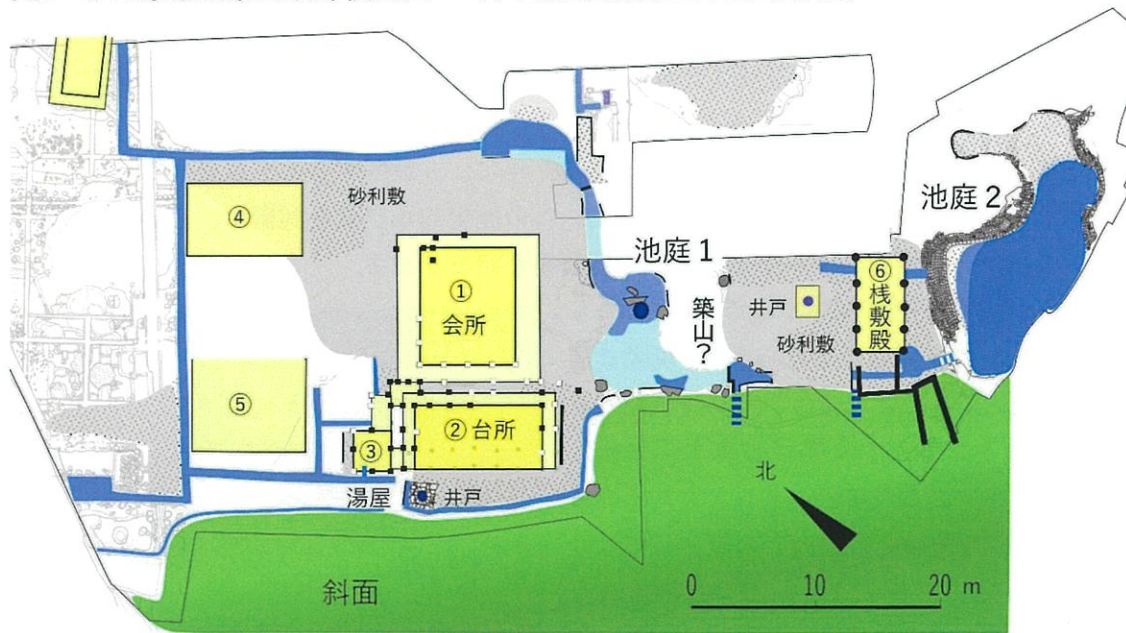


図8 小田城本丸模式図 (つくば市教委2015より作成)



図9 小田原城北条氏政邸模式図 (小田原市教委2016より作成)



館の南東部にあった庭園の池は、東西 67m、南北 30mもの大規模なものに改修し、政治や儀式を行う中心建物も建て替えられました。大友館は、北部九州一円を掌握した戦国大名としての威容を誇り、巨大な庭園や館の規模から見るものを圧倒した、大友家の権威を象徴する施設だったといえます。

3. 整備の方針

「(仮称)大友氏館跡歴史公園」は、大友氏館跡を主な範囲とし、これまでの発掘調査成果を踏まえて、宗麟・義統公の時代の姿を整備します。

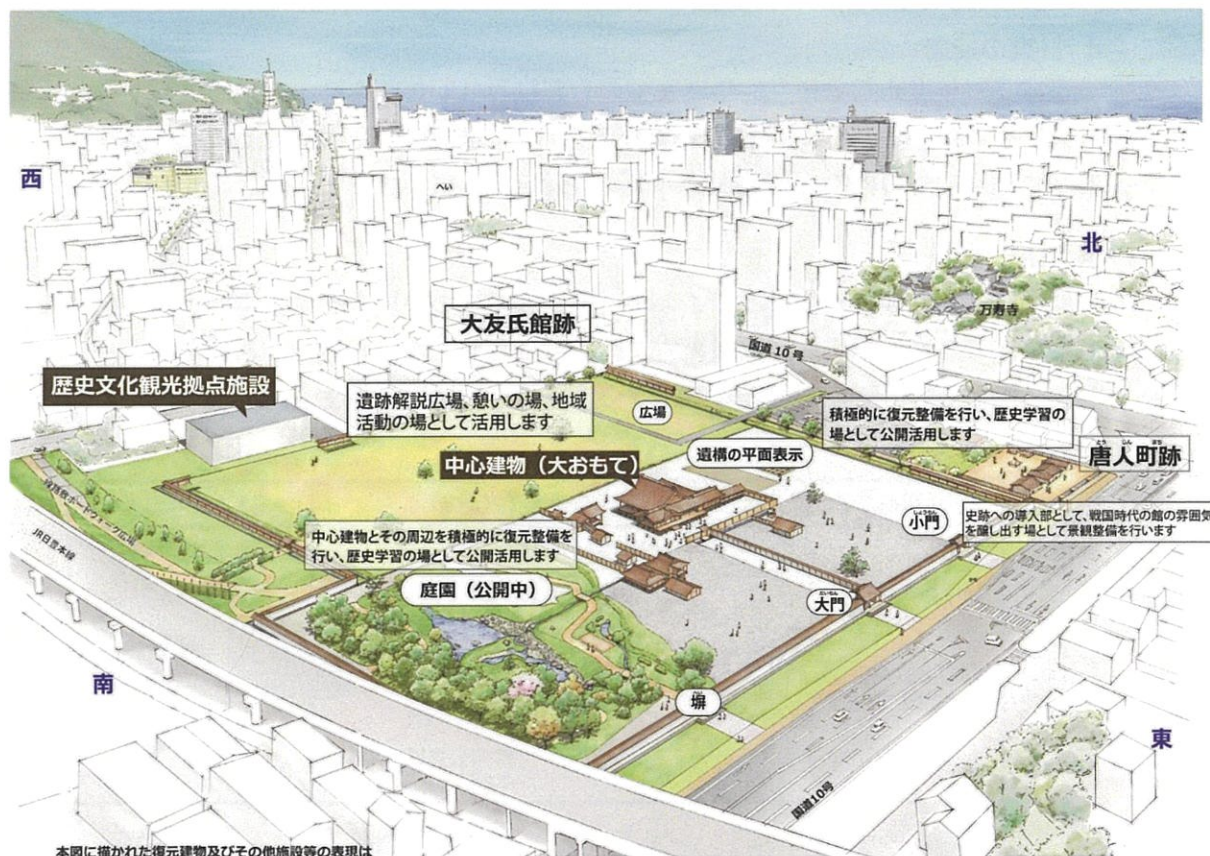
大友氏館跡の中心建物域では、復元整備を行い、「歴史体験ゾーン」として、公開活用を目指します。この歴史体験ゾーンでは中心建物や、塀や門などの施設を整備し、戦国時代の景観復元を目指します。また、大友家で執



大友氏館跡発掘調査状況全景(東から)



大友館周辺復元イメージCG(東から)



(仮称)大友氏館跡歴史公園イメージ図(南東から)

り行われた年中行事を現地にて体験することで、遺跡の価値や魅力を理解することができるよう工夫を行います。

遺構復元計画の内容 具体的には、発掘調査により遺構が確認された中心建物跡をはじめとする礎石建物跡などについて、立体的な復元を目指します。また、中心建物域で検出された塀などの遮蔽施設、井戸跡や区画溝、かわらけ大量廃棄土坑、砂利敷遺構などについても重要な構成要素として復元や表示を行うよう整備を検討していきます。大友氏館跡外郭域は、館の外郭施設であった築地塀、積土と溝からなる施設、門について復元整備を検討する。今後は築地跡の範囲、塀の位置や基底部幅・柱穴など構造の把握に努め、文献史料の「土圀廻屏」普請の記録とも照合し、外郭施設の復元整備を目指します。その他、唐人町跡は、発掘結果に基づき建物の復元整備を検討し、大友氏館跡西建物域においても遺構が良好に検出された場合は、建造物の復元を検討していきます。

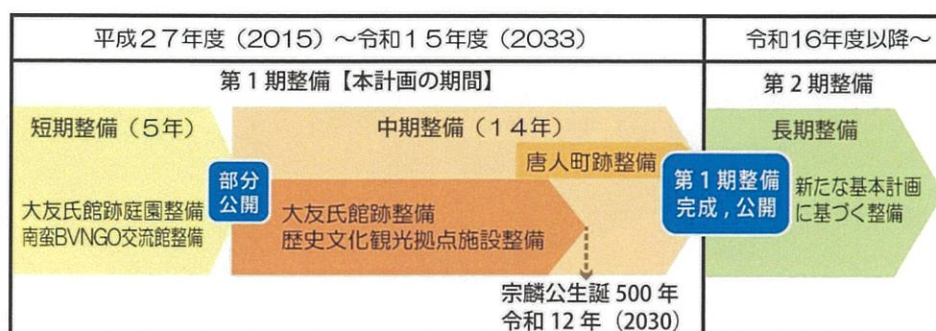
復元された建物等の活用 整備が進捗した段階において、復元された建物等の活用については、大友氏館跡の規模や空間を来訪者に体感してもらうとともに、「当家年中作法日記」等に記されている年中行事をリアルに体感できるよう努め、その建物が当時どのように使用されていたのかについて理解を促すようにする。戦国大名館で行われた年中行事の詳細が解明されている事例は少ないが、大友館では資史料が揃い研究が進んだことからその再現が可能であり、大友氏や大友氏遺跡の魅力を発信する市民団体などと連携し、CGなどのデジタル技術も利用しながら再現していくよう努める。

4. 計画の期間

平成 27 年度から令和 15 年度までのおおむね 19 年間で第 1 期整備とし、大友氏館跡は大友宗麟が 2030 年に生誕 500 年を迎えるのにあわせて、大友氏館跡では発掘調査成果を基に庭園以外の門や内部の建物の復元整備を行っていきます。

おわりに

歴史公園が完成した後は、この場所が、大友氏の歴史を感じる場、市民の憩いの場としてはもちろん、幅広い年齢層の方が、史跡に関わりながら様々な活動を行い、一年を通じて、賑わいの絶えない場となるように、整備を進めていきます。



整備スケジュール

A series of 20 horizontal dashed lines spanning the width of the page, intended for handwriting practice.

FUNAI ジュニア ガイド

FUNAI ジュニアガイドって？

大友氏を中心に、大分の歴史・文化の魅力を発信する大分市初の公式子どもガイドです！

大友宗麟のことを若い世代に広く知ってもらい、伝えていくことを目的として始めました。

「FUNAI ジュニア検定[※]」に合格した歴史大好きな子供たちです！

どんな活動をしているの？

市内で行われるイベントなどで、大友氏に関連する遺跡や歴史についてガイドを行っています。

テレビなどのメディアに出演したり、2019年のラグビーワールドカップでは英語でガイドをしたこともあります！

今年度は「ガイド動画」を初めて制作しました。構成や台本から、すべて子供たちが考えた手作り動画です！



※ FUNAI ジュニア検定とは

- …大分市が主催する小中学生を対象とした歴史検定。大友氏に関する問題を出題。
- 100点中90点以上で合格です。

大友氏館の模型について

本模型は、戦国時代の大友館にあった「中心建物」をイメージしたもので、大分県立大分工業高等学校建築科3年生が課題研究として製作しました。

中心建物とは、当主が政治や儀式を行った格式の高い建物で、200m四方の広大な館の中央に鎮座する東西約17m、南北約17mの規模をもつ大きな建物です。屋根は、柿^{こけら}とよばれる長方形の板材を密に積み重ねた構造であったと推測されます。製作に当たっては、大友氏館跡の発掘調査成果及び戦国時代の武家邸宅の姿を残す滋賀県^{おんじょうじ}園城寺にある国宝^{かんがくいんきやくてん}勸学院客殿（1601年建築）などを参考にしました。

模型の屋根は、スギ材の^{かんなくず}鉋屑を長方形に切ったものを使用し、これを丁寧に重ねることで、迫力ある建物に仕上がっています。また、建物の扉や窓、軒なども精緻に表現されており見ごたえがあります。

製作は、令和3年7月から令和4年1月にかけて行われ、約80時間もの時間を要しました。模型は、南蛮 BVNGO 交流館で展示中です。



模型正面



模型製作状況（屋根材貼り付け）



建物正面屋根部分拡大



令和4年2月8日に模型製作の市長報告会を実施

縮尺 50分の1
 材料 [屋根材] スギ材・スタイロホーム（断熱建材）
 [本体材] 厚紙・ヒノキ棒

建物規模 正面 394 mm × 奥行 338 mm × 高さ 230 mm
 製作期間 令和3年7月～令和4年1月
 製作 / 寄贈 大分県立大分工業高等学校建築科

主催：大分市、大分市教育委員会

後援：大分県、大分県教育委員会、大分合同新聞社、NHK大分放送局、OBS大分放送、TOSテレビ大分、OAB大分朝日放送、J:COM大分ケーブルテレコム、エフエム大分、大分市観光協会、大友氏顕彰会、大友氏遊学会、大友歴史保存会、豊後大友宗麟鉄砲隊、キリシタン南蛮文化交流協定協議会、NHK大河ドラマ「大友宗麟」誘致推進協議会

大友氏遺跡 史跡指定 20 周年記念シンポジウム
歴史とつながる 未来につなぐ
よみがえる大友館
予稿集

編集・発行／大分市・大分市教育委員会

発行日／令和 4 年（2022）年 4 月 16 日

